

釧路南ロータリークラブ会報

第13回 例会報告 2011.10.12 通算1413回

・点 鐘 4クラブ会長による合同作業

・ロータリーソング
「君が代」



ソングリーダー 釧路北 RC 石井 東洋彦会員

・ホストクラブ会長挨拶 釧路北会長 能登信孝



今日はRI2680 地区深川純一パストガバナーをお招きしての「職業奉仕について」の講演例会となっております。RI 会長代理、記念講演を多くなされている深川先生の講演なので、分区内の各クラブに声をかけましたら市内4クラブ、釧路東、釧路南、釧路ベイロータリークラブの合同例会とすることになりました。また第7分区吉田ガバナー補佐はじめ、このように多くの皆様にお越しいただきまして有難うございます。

深川パストガバナーにおかれましては、大変ご多忙のなか遠く兵庫よりきていただきまして、厚くお礼申しあげます。釧路北ロータリークラブ創立50周年には記念講演として「永遠の課題・職業倫理」と題して感銘深い、有益な講演していただきました。翌年は「職業倫理パート2」そして昨年10月には「職業奉仕のいろは」というべき基礎的なお話をわかりやすくしていただきました。ロータリーの奉仕活動の中で職業奉仕という言葉は馴染み深い言葉であり、またロータリー活動の中核をなす言葉であります。職業奉仕は難しいのが現実あります。ロータリーの実践と多くの業績をのこされている深川先生のお話しのなかから職業奉仕を理解するために、大切なことは何かを修得していただければと思います。今日は多くの皆様にご出席をいただき有難うございます。短い時間で申し訳ございませんが深川先生ご講演よろしくお願いたします。

・委員会報告
出席委員会

会員22名 12名出席 出席率55%

・本日のプログラム

「職業奉仕について」

担当 4RC 合同例会

◆講演 深川純一様(第2680 地区PDG 伊丹RC)



このたびはまた、足立先生のお肝煎りでお招きを頂きまして誠に有難うございました。今日は、ロータ

一アクトの人達や新会員の方々もご参加と聞いておりますので、職業奉仕を理解するために一番大切なことは一体何か、という視点からお話しを申し上げたいと思います。昨年は、職業奉仕の根本原理をお話し申し上げました。ロータリーは倫理運動でありますから、倫理の問題としては、人間の行動パターンを愛情の世界と打算の世界に分析して、職業奉仕というものは、愛情の世界の論理を持って打算の世界をコントロールするもの、言い方を換えれば、打算の世界である職業に愛情を込めるといってお話し致しました。そこで、今日は少し視点を変えまして、一つの物語から話しに入りたいと思うのであります。それは「韋駄天」という仏様の物語であります。これは、今の天皇陛下が未だ皇太子殿下であらせられた頃、宇治の黄檗宗の総本山万福寺をお訪ねになったときの話であります。

接待にでられた御老師は、「自分は禅坊主だから、この寺が紀元何年に建てられたとか、この扁額は誰が書いたとか、そのような俗な話をするわけにはいかない」と言われて、皇太子殿下に『韋駄天』という仏様の話をなさいました。韋駄天という仏様は、どのような仏様かと申しますと、仏様にも色々位がありまして、最も位の高いのが、阿弥陀如来、大日如来のように名前の下に如来という言葉のついている仏様、そして、その次の位が、勢至菩薩、普賢菩薩のように菩薩という字の付いている仏様、そして、更にその下の位が、毘沙門天、帝釈天、韋駄天のように天という字のついている仏様であります。

この天という字のついた仏様は、どのような役目をもった仏様かと申しますと、私達の日常生活百般のことを司る役目をもった仏様のことでありまして、その中の韋駄天という仏様は、どのような役目をもった仏様かと申しますと、夜の帳に終わりが参りまして、東の空が白んで参ります。やがて、山の端に太陽がチラッと覗きます。朝日がサアッと大地にさして来る、その一瞬を捉えまして、仏様の懐から出て、仏様の御使いとして、全世界の家庭を訪れます。そして、足立パストガバナーのお宅を訪れて窓を開けて、今日一日この足立家に仏の幸せがありますようにと祈ります。そして、今度は、会長のお宅を訪れて、今日一日この家に仏の幸せがありますようにと祈ります。

このようにして、朝日がサアッと大地に差し込んだ一瞬の内に全世界の家庭を訪れて幸せを祈り、そしてまたその一瞬の内に舞い戻って、只今全世界の家

庭に仏の幸せを祈って参りました、と復命をする役目をもった仏様のことを韋駄天というのであります。韋駄天という言葉は、ご承知のとおり『韋駄天走り』という言葉があるように、非常に早いことの意味に使われるのはこのことなのであります。御老師は、皇太子殿下に『貴方は、やがて天子様になられるお方でございます。今日の老僧との出会いを大切になさって、この世の中に、毎朝、全ての人の幸せを祈る韋駄天という仏様のいることを心に留めておられますように』という話をされたそうであります。申すまでもなく、この話は帝王学の根底に流れる思想を説いています。即ち、私達は人間である以上、世の中には、好きな人もいます。しかし、嫌いな人も、憎い人も沢山居ます。にも拘わらず毎朝その全ての人の幸せを祈る韋駄天の心、これは天子様にとっては、欠くことの出来ない心であろうかと思うのであります。ところで、私は、この韋駄天の心は何も天子様に限らず、ロータリアンの心の根底に流れる思想でもあると思うのであります。何故ならば、ロータリアンは、皆、社会の管理者として長たる立場にある人であります。凡そ組織の長たる立場にある者は須くこの韋駄天の心がなければならぬと思うからであります。例えば、会社の社長さんについて言えば、長たる者が、毎朝、自分の部下将兵の幸せを祈る心をもっているか否かにより、その会社のあり方が違ってくるだろうと思うのであります。この韋駄天の心をもったロータリアンの会社は、恐らくどのような不況期にも潰れないであろうし、長期的に安定した利潤を着々と獲得して行くであろうと思うのであります。では、そのことを立証する事実があるのか。実は、1929年に始まるアメリカ経済社会を襲った空前絶後の大パニック。あの時に、ロータリアンは一人も倒産していなかったのであります。それは将に、職業倫理を身につけ、職業奉仕を実践していた功德だと謂われています。したがって、韋駄天の心は職業奉仕の核にある思想でもあると思うのであります。

そして更に、世界中の全ての人の幸せを祈るこの韋駄天の心は、職業奉仕に限らず、社会奉仕、国際奉仕、世界社会奉仕等ロータリーの全ての奉仕の実践をするについても、ロータリアンの心の根底に流れる思想であろうかと思うのであります。世界中の全ての人の幸せを祈る韋駄天の心、これはロータリアンにとって欠くことの出来ない心、終生肝に銘ずべき心であろうかと思うのであります。1962

ー63年度の国際ロータリー会長、インドのカルカッタ・ロータリークラブから出ました偉大なロータリーの思想家ニティッシュ・ラハリーは、『世界中の何処かの片隅に、一人でも不幸な人がいる限り、我々ロータリアンは永久に幸せになることが出来ない。心の中に火を燃やそうKindle the spark within!』と謂う有名なターゲットを打ち上げました。これは、誠に、東洋的な神秘的なターゲットでありまして、心の中に火を燃やすことによって、この世の中を明るくしていこうというのであります。そして、そのためには、私達ロータリアンが、この世の中の全ての人達の幸せを祈らなければならない、とラハリー元会長は呼びかけているのであります。ロータリアン全てがお互いに幸せを祈り合う、そのようなロータリーであって、始めて世界平和の実現に寄与することが出来ると思うのであります。したがって、ロータリアンの皆さん方が、自分の企業を管理するに際しても、更に、地域社会、国際社会に奉仕するに際しても、毎朝全ての人達の幸せを祈る韋駄天という仏様が居ることを心に留めておくべきであると思うのであります。実は、ロータリアンとは、その心の根底に韋駄天の心を持っている人達のことであると思うのであります。このように、ロータリアン一人ひとりの心の中にあるものが大切なのであります。幸せを祈るという目に見えない大切なものを心の中に籠めること、これがロータリーの中核にある考え方であると思うのであります。したがって、私は、ロータリーは祈りの哲学であるとも考えているのであります。

さて、今年3月11日、東日本大震災が発生しました。国内はもとより国外からも沢山の義捐金が集まり、ボランティア活動が行われています。これは日本のみならず世界中の人達が被災者の幸せを祈ってくれている証しであります。ただ、今回の災害は、地震、津波のみならず更に原発事故が加わったために、被災の状況が複雑であります。そのため、未だに復興どころか復旧もままならない状況であります。しかし、世界中の人々に被災者の幸せを祈る心がある限り、やがて、東日本は復旧、復興を成し遂げ、日本社会はこれを契機に大きく変わって行くだろうと思うのであります。

先程、心の問題を重視するのがロータリーの奉仕だと申し上げました。そこで、この心の問題で一番大切なものは何か、それは倫理であります。したがって、ロータリーは倫理運動と謂われているのであり

ます。殊に、ロータリアンは皆、職業人でありますから倫理の中でも職業倫理が最も大切であります。そこで今度は少し視点を変えて職業倫理の事例を紹介します。今月は御承知のとおり職業奉仕月間であります。

実は、この季節は、落鮎の季節でもあります。落鮎というのは秋に獲れる鮎のことでもあります。北海道に鮎が居るかどうかわからないのでありますが、鮎と同じ鱒科の魚であります。鮎は、一年魚でありますから、一年で育ち切って、秋になると、自らの血脈を残すために川を下ります。そして、河口近くに産卵して、一年の短い一生を終えるのであります。しかし、全ての鮎がこの様に天寿を全うするわけではありません。多くの鮎が人間に釣り上げられて命を落とします。就中、鮎の友釣は、鮎の悲しい習性を利用した釣法であります。即ち、鮎の社会では、自分の餌場を確保するために、激しい競争原理が支配します。強い鮎がテリトリーをもって餌場を独占し、他の鮎がそのテリトリーを侵すと、猛然と攻撃してこれを追っ払います。この習性を利用して、釣針を仕掛けた四鮎を野鮎のテリトリーへ誘導し、野鮎の攻撃を誘って釣り上げるのであります。したがって、もし、鮎達に餌を皆で分かち食う共存共栄の心があったならば、鮎の友釣は成り立たないのであります。ところで、このような鮎の競争社会で、自分の餌場を独占して自分だけが大きく育って行こうとする鮎の生態を思うとき、同じく自由競争原理の支配する私達の職業社会は、果たして如何なるものであろうかと思うのであります。鮎のように自分だけが市場を独占して、自分だけが大きく隆々と栄えて行こうとする経営者が居ることは如何なるものでありましようか。先ず『同業者』の問題があります。資本制経済社会は、自由競争が基本原則であります。したがって、自由競争社会では、同業者は、正に食うか食われるかの関係にあり、競争相手がいるが故に、ある種の危機感を持ちます。したがって、自分が潰れる前に彼が潰れてほしいという訳の判らない感情の虜にもなります。また、同業者は同じ業界にいますから、お互いに、善いところは知っています。しかし、お互いに悪いところも、醜いところも、汚いところも知り尽くしています。したがって、彼は俺の欠点を知っているなという意識がありますから、お互いに心を開くことができません。更に人間は、自分だけは先ず栄えておかなければ、いつ潰されるかも知れないと思いますから、人のことなど

考えている暇はない、即ち倫理のことなど考えている暇はないと言って、自分だけ隆々と栄えて行こうとします。そのために失敗する例が沢山あります。一つの事例を出しておきます。或る下請業者が親会社から自分の生産能力を越える注文を受けました。下請業者は喜んで、銀行から融資を受け、第二工場、第三工場と設備投資を致します。ところが、この設備投資がある程度大きくなった時点で、親会社が注文を止めます。下請業者は、受注の減少によって融資の返済に困り、親会社に泣きつきます。親会社は、それでは金を貸そうと言って資本参加をして、結局、下請業者を乗っ取ってしまうのであります。これは、企業が比較的短期間に大資本に成長していくプロセスでよく見られる恨みつらみのある物語であります。一般社会の常識では、この事例について、これは親会社の方が悪いというでしょう。しかし、ロータリーの考え方はそうではありません。これは親会社が悪いのではなく、下請業者が自分一人で儲けようとしたところに問題があるのであります。一般社会の常識とは逆転の発想であります。即ち、自分の生産能力を越える注文が来たときに、同業者も居ることですから、これ以上の御注文は同業者の方へどうぞ、と言っておればよかったです。しかし、そうは言うものの企業経営者は、自分の企業を安泰にさせたいために、注文が来れば、どうしても沢山注文をとって儲けたくります。これが人情であります。ここのところが大変難しいのであります。これに反して、例えば、或る有名な菓子屋では、いつも午後3時頃になると、商品が売切れます。有名な店だから作れば作るほど幾らでも売れるのであります。午後3時頃になると売切れてしまう、その程度の商品しか作らないのであります。それは一体何故か？確かに、作れば作るほどいくらかでも売れます。儲けに儲けることは出来ません。しかし、自分の生産能力を越えて、150% 200%の商品を作れば、儲かるかも知れませんが、粗悪品の出る可能性も出て来ます。一つでも粗悪品が出ると、お客様に御迷惑をかけることになり、更に、自分の信用を傷つけることにもなります。信用というのは、金銭をもってしては計り知れないほど価値のあるものであり、一旦失ったら取り返しの付かないものなのであります。したがって、精魂込めて自分の生産能力の80%の商品しか作らないのであります。これが「職業の倫理」というものであります。そして、自分の生産能力を越える注文に対して

は同業者の方へ譲るのであります。これが同業共存共栄の倫理であります。このように、古来、人間が徒らに金を求めて身を滅ぼした例は枚挙に暇がありません。しかし、人間が心を求めて即ち、倫理を求めて身を滅ぼしたことは、未だその例を聞かないのであります。ロータリーは、倫理の裏打ちのある企業活動こそが永続的に安定した利潤を着々と獲得し、自由競争を必ず勝ち抜いて行くということを原理論的にも実践論的にも証明して行くものなのであります。一体そのようなことが証明されているのか。既に証明されている事実としては、1929年に始まるアメリカ経済社会を襲った空前絶後の大パニック。あの時に、ロータリアンは一人も倒産していなかったという事実があります。これは、ロータリアンが毎週一回の例会において企業経営上のアイデアを交換し、倫理的な企業活動のノウハウを開発し、それを自らの企業に実践してきた功德だと謂われているのであります。この故に、ロータリーの職業奉仕は、不況期に強い哲学であるとも謂われているのであります。では、ロータリアンだけが倒産せずに生き残ればよいというのか、と言うと、そうではありません。ロータリアンは、職業奉仕の原理を実践することにより、必ず自由競争の勝者になることができます。そして、勝者になる過程 Process において、自由競争に破れて行った敗者の代弁者となって、世のため人のために力を尽くさなければならぬということをロータリーは説いているのであります。殊に、ロータリーは倫理運動の視点に立って、同業関係や下請関係においては、常に倫理を提唱し、共存共栄の道を模索すべきことを説くのであります。これは、職業奉仕の大きな柱であり、ロータリーが倫理運動であることの面目躍如たる場面なのであります。真にロータリーは、人類文化史が20世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動なのであります。このことは、ロータリーの綱領を見れば、一目瞭然に諒解されるのであります。以上を要するに、同業関係を貫く指導理念は同業共存共栄であります。ロータリーの職業奉仕は、如何にすれば同業共存共栄の実を上げることができるか、という原理を説くものであります。そこで、ロータリーは、この問題については、かなり理性的な分析をしまして、自由競争の長所と短所を引出すことに成功しているのであります。先ず長所は何か。自由競争は技術開発に役立つのであります。競争でありますから新しい技術を開発しま

す。したがって、製造技術・販売技術、その他諸々の技術開発には大変役立つのであります。

次に短所は何か。自由競争には同業者が居ますから、互いにある種の危機感を持ち、疑心暗鬼になります。これを取り除かなければ同業共存共栄の理想を達成することはできません。そこで、疑心暗鬼を取り除くためには、例会で良質なIdeaを開発し、これを業界に持って行って同業者とIdeaの交換をする必要があります。そのためには、先ず同業組合を結成して、皆で共同してIdeaを開発しなければなりません。勿論、同業組合が全国的になると各地のロータリアン達が参加します。そこで、ロータリアンは、手に手つないで同業組合育成にリーダーシップをとるようにしなければならないのであります。これが職業を通じて世のため人のために奉仕することになるのであります。

同業者がIdeaの交換、Ideaの共同開発を行った上で、自由競争のための武器であるIdeaは、お互いに平等対等を持って、自由競争は自由競争で一生懸命にやろうというのがロータリーの同業関係における基本的な図式（武器対等の原則）であります。自分だけが優れたIdeaを持って栄えていこうというのは、自分のことしか考えないエゴイストであり、到底世のため人のためのことを考えているとは謂えないのであります。同業者が、手に手つないでIdeaの共同開発をする、その元になる良いIdeaは、ロータリアンがロータリークラブの中から持ってくるという図式であります。では、具体的には、一体どのような方法によるべきなのか。ロータリアンは、自由競争社会において職業奉仕を実践することにより、必ず勝者になります。その勝者になる過程Processにおいて、或いは勝者になった後で、敗者の代弁者になって救済の手を差し延べなければなりません。その方法は、先ず、自分が成功して勝者になったノウハウを敗者に公開することであり、次に、職業人として為すべきこと為すべからざることをお互いに誓い合うこと、いわゆる職業倫理の提唱であります。第一に『ノウハウの公開』。先ず、同業者間の疑心暗鬼・危機感を払拭して、共存共栄の実を上げるためには『ノウハウの公開』が必要不可欠であります。ロータリアンがクラブ例会に出席して得た諸々のIdeaを、自分の企業に適用することにより成功したならば、その成功したノウハウを同業組合にもって行って同業者に披露するのであります。

ノウハウを公開すれば、自由競争に負けてしまうと考える人がありますが、実は、返って共存共栄の実が上がるのであります。即ち、ここで所謂ノウハウとは、産業秘密的なものではありません。成功することが完全に証明されたノウハウのことです。何故ならば、もし、成功することが証明されていないものを公開して、それを適用した人が失敗すれば、他人に迷惑をかけることになり、世のため人のためにはならないからであります。成功することが完全に証明されたノウハウを同業者のために、更に自由競争に破れて行った敗者のために公開するのであります。事例を紹介しておきます。1954年度RI会長ハーバート・テイラーは、1932年に倒産したアルミ食器会社の再建を依頼され、約10年後に一流の企業に育て上げましたが、それを見たシカゴ商工会議所の人達が、テイラーに対し『君は素晴らしいことを成し遂げたね。何か秘密があるだろう。手のうちを明かせよ』と言いましたところ、テイラーは『実は、四つのテストというものを考案して皆で力を合わせて頑張ったんだ』と答えました。そこで、商工会議所の人達は、『そのノウ・ハウは、君が成功したことによって完全に証明されている。それを皆に披露しよう』と謂って商工会議所傘下の企業家達に公開されることになったのであります。これを見て、シカゴクラブの会員達が、『それをロータリーへ譲らないか』と謂うことになり、1954年、彼が国際ロータリーの会長に就任したのを契機に、その著作権を国際ロータリーへ委譲したのであります。これは商工会議所からロータリーへ逆輸入された例であります。本来はロータリークラブでノウハウを開発し、それを同業共存共栄のために同業組合で公開し、更に商工会議所で公開するというのがロータリーの奉仕の図式であります。

ノウハウ公開の事例をもう一つ紹介しておきます。千葉医大の中山恒明教授は、従来、死亡率90%以上と謂われた食道癌について、2年間訓練された外科医であれば誰でも簡単に手術できる手術法を開発して、そのノウ・ハウを誰にでも教えたのであります。その理由は、自分一人では一日に100人の患者を手術することはできないが、このノウ・ハウを100人の外科医に教えておけば、一日に100人の患者を救うことができる。医は、公のものであって、私にすべきものではないというのであります。これは、中世ヨーロッパ以来のprofessionの倫理、即ち、医学が神学の分かれであることを大悟徹底した人の言

業であります。

序でながら、中山先生は『医師になってほしい人は、頭の良い人であるに越したことはないが、剃刀のように切れる鋭い頭脳の持ち主よりも、動物や草花を愛する人間性の豊かな人に医師になって欲しい』とも言っておられるのであります。これは将に、倫理的な人間に医師になってほしいということであり、人を救うことを職業の第一義とするprofessionの倫理、即ち、愛をもって職業をコントロールするために、欠くことのできない要素であろうかと思うのであります。何はともあれ、同業共存共栄のためには、ノウハウを公開すべきであります。同業が栄えるということは、必ず自分も栄えることになって来るのであります。したがって、自分が栄えるために同業者が潰れてほしいなどという論理は、ロータリーでは通用しないのであります。

更に、事例を紹介しておきます。西ドイツが未だシュミット首相の時代の古い話であります。首相が破産寸前のイタリアを救うために、返済の見込みのない20億ドルの借款を与えようと議会に提案した時に、議会の猛反対に対してシュミット首相は、『イタリアの崩壊はヨーロッパ共同体の崩壊を意味する。ヨーロッパ共同体が崩壊すればドイツも危ない。したがって、ドイツが生き延びるためには、イタリアを救わねばならない』という論理をもって議会を説得したそうであります。やはり、他人を生かしてこそ自分の生きる道もある。ロータリーの説く共存共栄というのは、かなり厳しいものでありまして、このことも心に留めておかなければならないと思います。これは今の世の中にも当て嵌まる論理であります。

ロータリアンは、よく「相手の身になって考える」ということを簡単に言いますが、「相手の身になって考える」ということは、自分の考え方を崩してしまうことを意味します。したがって、このことが非常に厳しいものであること、そして、そのことがこれからの時代を生き抜く道でもある、ということを中心に留めておかなければならないと思うのであります。要するに、自由競争には、甘えの論理は全くありません。したがって、自由競争を前提とする職業奉仕にも甘えの論理は全くありません。時々、誤解をして、奉仕というある種のロマンチズムに酔って競争意欲をなくしてしまう人があります。即ち、自分はロータリークラブを退会して、自由競争で思い切り金を儲けた後、再びロータリーに入会して奉仕す

るという人がいますが、これは職業奉仕を全く誤解しているものであります。

職業奉仕は、同業者との関係では将に闘争の論理なのであります。甘さは一切ありません。闘争に勝とうと思えば、職業奉仕に徹することでありまして。したがって、職業奉仕の判らないロータリアンは自由競争に敗れていくと思うのであります。最近、ロータリーを辞めていく人が増えていますが、これは職業奉仕が判らないからであります。また、これはロータリアン教育の問題でもあります。本当に職業奉仕が身に付いたならば、ロータリーを辞めることはありません。職業奉仕の魅力の虜になって、隆々と栄えて行くだろうと思います。昔は、一旦、ロータリーに入会すれば、退会する人など殆ど居なかったのであります。

自由競争社会を生き抜いていく時に、勝利者になる過程において、敗者を救済しながら栄えていく、共存共栄の道を模索することによって、初めて、自分は、一私企業の社長にとどまらず、世のため人のための支柱にもなっているのだ、という自覚を持つことが出来るのであり、自分のためのものである職業が、同時に人のための奉仕にもなるのであります。ここに人生の意義があるのであって、自分のことしか考えない人生には何らの意味もありません。自分も儲けるが、その儲ける考え方は、同時に、周りの人達も儲ける策を作っていく、こういう形になって初めて、二度とない人生を意義あらしめることができるのであります。これは、甘えの論理ではないので注意を要する所であります。

第二に『倫理の提唱』であります。自由競争の敗者を救済する第二の方法であります。同業者の共存共栄のためには、ノウハウの公開の他に『倫理の提唱』が必要であります。業界を浄化して、共存共栄の実を上げるためには、同業者が互いに、為すべきこと為すべからざることを誓い合い、これを自由競争の敗者に、更に地域社会の職業人に対して提唱する必要がありますのであります。これはロータリーが倫理運動であることの面目躍如たる場面であり、職業を通じて社会に奉仕する典型的な事例であります。即ち、ロータリークラブの例会は、良質な職業人の発想の交換・自己研鑽の場であります。ロータリアンは発想の交換・自己研鑽によって、よりよき自分というものを自覚していくわけでありまして、それぞれは企業経験を中心にしていますから、企業経営観の改善という形につながって行きます。

そこで、その経営観の総和をとらえてみると、地域社会に存在する全ての職業に適用せられるべき理想的な職業観、職業の倫理を宣言することができるのであります。ロータリーが最初にこの宣言をしたのが、1915年のサンフランシスコ国際大会の決議による『全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓』(所謂ロータリー道徳律・11ヶ条)であります。その後、昭和3年(1928)大連ロータリークラブの古沢文作氏がこれを発見し、5ヶ条の日本語に書き改めたのが、昭和3年の『大連クラブのロータリー宣言』であり、これが戦前の日本のロータリアンの職業奉仕のバックボーンとなっていたことは、紛れもない事実なのであります。

次に『商工会議所』の問題があります。同業関係においてノウハウを公開し、職業倫理を提唱していくために、同業組合結成運動の延長線上に商工会議所育成運動があります。これが同業関係においてロータリアンの進むべき道であります。1930年頃から1945年頃にかけて、ロータリーがアメリカ社会から非常な尊敬と信頼をもって迎えられたことがあります。それには、彼等が、世のため人のためにこれだけのことをしたという確固たる実践の軌跡がなければなりません。では、その確固たる実践の軌跡とは一体何か、と言うと、実は、1929年から始まったアメリカ経済社会の空前絶後の大恐慌に際し、アメリカのロータリアンが職業奉仕の実践の一つとして、自由競争に敗れていった敗者を救済するためにノウハウを公開し、倫理を提唱し、そして、その手段として同業組合を作り、商工会議所を育てて行った、そのことが、アメリカ社会から大変な尊敬と信頼をもって迎えられたのであります。

このように、ロータリーがアメリカ経済社会の中で果たした最大の功績の一つが同業組合の結成運動と商工会議所の育成運動であったのであります。1910年から1942年まで32年間国際ロータリーの事務総長を勤めたチェスレー・ペリーは、『ロータリーが出来た時のことを考えてみよう。アメリカ社会に同業組合は一つもなかった。これはロータリーが作って行った。商工会議所はあるにはあった。しかし、南北戦争後の工業化の波による人口の都市集中により、都市機能が麻痺し、商工会議所はその行方を見失っていた。この同業組合のないところに同業組合を作り、やる気をなくしていた商工会議所を、倫理を提唱する団体として蘇らせていったのはロータリーがアメリカ社会に残した最大の功德だ。ロータリ

一の功績歴然たるものがある』と言い切っているのであります。このように、同業組合と商工会議所とは、非常に大切な機能を持っているのでありまして、ロータリー運動がアメリカ社会に残した最大の功績なのであります。したがって、ロータリーの中で職業倫理の原型パターンを作り、それを商工会議所に移植して周知徹底させる、これがロータリアンの進むべき道であります。したがって、日本のロータリアンは、同業組合の体質改善を図り、商工会議所をロータリーの経営理論に合わせて運営するという具合に、商工会議所の中でリーダーシップをとるようにしなければならないと思うのであります。何はともあれ、ロータリーは倫理運動の視点に立って、同業者関係や下請関係においては、常に倫理を提唱し、共存共栄の道を模索すべきことを説くのであります。これは、職業奉仕の大きな柱であり、ロータリーが倫理運動であることの面目躍如たる場面なのであります。

さて、今、同業関係について申し上げましたので、その関連から下請関係についても触れておきます。ところで、資本主義経済社会は、分業を通じて発展して来たものであります。イギリスのグラスゴー大学のアダム・スミス教授の著書、経済学のバイブルといわれる『国富論』の冒頭に出て来るのが、実は分業なのであります。

現在、資本主義社会は、分業によって効率を高めて行くところから、簡単な商品を生産する場合でも、下請との関係を持たない会社は殆どありません。部品などは専門家に任せた方が良質なものを安く作ることが出来るので、人間は、分業に分業を重ねて来たのであります。ところが、分業の当事者、即ち、親会社と下請との間の力のバランスが崩れていて、資本力は、原則として親会社の方が強いのであります。そこで、ローマの諺に『人は人にとって狼である』と言われるように、力の強い者が弱い者を犠牲にして行くことになるのであります。

ここにマルクス・レーニン主義が出て来た一つの原因があります。例えば、物を作って売って1円の金を得たとします。1円というものは交換価値でありますから、1円と等価値の物と交換出来ます。そこで、これを1万倍して1万円の金を持っているとすると、1円の物を1万倍した物しか買えないか、と言うと、実はそうはならないのであります。交換価値を交換力と考えますと、1円の1万倍は、数値の上ではまさに1万円になりますが、現実には物と交換

する場合には、1万円以上の物と交換することができますのであります。したがって、1万円持って居る人と1円しか持っていない人とでは、交換力に差が出てくるわけでありまして、したがって、大資本は益々大きくなります。この点が、マルクスの言う『資本の論理は力の論理』であって、マルクス主義は、このアンバランスを国家権力によって調整しようとする発想なのであります。ところが、ロータリーは、倫理運動の立場から、このアンバランスを徳の力によって調整しようとし、徳というものは、目に見えないものであります、何億円にも替え難いほど価値のあるものであります。この徳の力を一枚入れる、これが倫理運動たるロータリーの考え方であり、この考え方から、二つの倫理原則を出すことができるのであります。

第一に『利益の適正分配の原則』があります。これを一言で言えば、『人を泣かせて、その上に自分の幸せを築くなよ』と言うことであります。資本主義経済社会は、自由競争を前提としています。自由競争は、無駄なエネルギーを節約するために競争入札をします。しかし、力のバランスが崩れていると、力の強い者が弱い者を叩くという現象が起こります。元請から下請、下請から孫請へと叩いて行きます。ところが、あまりに叩きすぎると、やがて、叩かれた方が裏切ることになり、裏切ることになります。したがって、搾取の系列による構造の業界は、この点をよく考えなければなりません。何故ならば、これでは、共存共栄は果たせないからであります。まさにこれは商工会議所や同業組合がリーダーシップをとるべき場面であり、ロータリアンがリーダーシップをとるべき場面であり、要するに、これは「公平の原則」であります。しかも、「法的原則」ではなく「倫理原則」であります。

事例を紹介しておきます。ハーバート・テイラーに再び登場願うこととなりますが、1932年に倒産したアルミ食器会社の再建を引き受け、10年後に一流の企業に育て上げた時に使ったのが、実は、この「公平の原則」なのであります。或る日、彼は、印刷業者と契約をしました。ところが、契約を締結した後で、その印刷業者が自宅に帰ってから、自分の計算違いのため、その契約では大変な損失を被ることが明らかになりました。しかし、契約は締結されてしまっているので今更取消することもできません。さればと云って、損をすることが判っていながら真面目な仕事ができるかどうか判りません。そこで、彼

は、断られても元々だと思っ、テイラーに事情を打ち明け、契約のやり直しを申し入れました。テイラーは『それはお気の毒だ。しかし、皆の意見を聞かなければならない』と言って、この問題を取締役会にかけました。取締役会では、『契約は締結されている。我々は一銭も値切らずに印刷業者の言いなりに契約をしたのだから、契約は守ってもらおう』と言う意見でありました。しかし、テイラーは、『我々は、「四つのテスト」を誓い合っているではないか。この契約で真実とは何か、と言え、契約通りにことを運べば相手が確実に損をするということである。しかも、この契約は、相手の真実の意思に基づいたものではない。錯誤によるものだ。そのことが、みんなに公平と言えるのであろうか、好意と友情を深めることになるのであろうか、そして、みんなのためになるのであろうか』という論法で取締役会を説得し、結局、印刷業者が損をしない程度に契約のやり直しをしたのであります。このことが口込みで業界に伝わり、テイラーの会社は大したものだ。彼と取引をすれば安心だと謂うことになり、益々信用を確立することになったのであります。これは、自分の会社が儲ける反面において、下請の印刷会社が泣く、即ち、『人を泣かせてその上に自分の幸せを築くなよ』ということ、利益は、親会社も下請も全てに適正に分配されなければならぬという利益の適正分配の原則の実践例であります。テイラーは、自分と取引をする全ての業者に対して利益の適正分配を何時も考えたと言います。これが、徳の力によって資本力のアンバランスを調整する実践例なのであります。要するに、ロータリーは倫理の世界でありますから、倫理的に物事を処理しなければなりません、法律的に処理しなければならない場合には、倫理の裏打ちのある法律論を出すことを考えなければならぬのであります。

ところで、倫理運動としてのロータリーの立場からは、下請に対する支払は、出来るだけ現金をもって支払うのが望ましいのであります。小切手は、大金の支払にだけ使うべきであります。手形をきる場合も、3ヶ月を限度とすべきであり、それ以上の長期は下請を泣かせることとなります。台風手形（二十日・7ヶ月）や飛行機手形（滅多に落ちない）などは、人を泣かせること甚だしいものであります。元来、このような手形は流通性がありませんから、このような手形を発行すること自体、自らの信用を失うことになるのであります。それでは、反対に手

形で支払をうけた時は、どのように対処すべきでしょうか。『支払期日7ヶ月、210日よろしゅうございます。期日まで金庫に入れておいて、期日がくれば手形交換に回しますから、どうぞ御心配なさいませぬように』と言えば、相手も多少恥ずかしく思います。このようなことを通じて、世のため人のために相手を教育していくこともまた大事なことであります。また、このようなことを通じて、徐々に業界を浄化して行く、これが職業を通じて世のため人のために、と謂うことの一つの意味であろうかと思うのであります。また同時に、あの会社は、信用状態100%だということになって、自らの信用が確立するに至るのであります。

第二に『賄賂禁止の原則』があります。親会社と子会社、元請と下請その他あらゆる取引関係において、当事者の力のバランスが崩れると、力の弱い者が強い者に対して賄賂を贈るという現象が起ります。これは、自分だけが良い仕事にありつこうというエゴイズムの心に基づくものでありますから、もとより同業共存共栄・公正な取引社会の実現という理想にはほど遠いものであります。そこで、ロータリーは、古来、倫理運動の視点から、賄賂の授受を厳に戒めているのであり、これは職業奉仕論の核にある大きな柱であります。昭和六年の日本の2代目のガバナー井坂孝のガバナー月信第1号(S.6.8.10)は、夙に有名であります。彼は、国際ロータリー第70地区のガバナーに就任して、全国のロータリアンが拳々服膺すべき職業倫理の三ヶ条を提唱しました。即ち、第一に曰ク、ロータリアンたる者は約束を守るべし。第二に曰ク、ロータリアンたる者は賄賂を贈ることなかれ。

第三に曰ク、ロータリアンたる者は徒に慈善事業に憂き身をやつすことなかれ。第一の約束を守るというのは、ロータリアンは職業人でありますから、契約を守ること即ち、契約的正義の実現を説くものであります。更に、約束を守るということの中には、時間を守るということが当然含まれています。時間は万人の共有物であります。時間を守らないということは、全ての人に迷惑をかけ、信用を失うことになるのであります。時間を守るということは、古来、ロータリーの精神伝統となっているのであります。第二は、賄賂を贈ることなかれ。これは、言うまでもなく、賄賂の横行しない健全な取引社会・公正な自由競争社会の実現をめざすものであります。第三は、慈善事業の実践を否定するものではありません

が、それに憂き身をやつしてはならない、即ち、慈善事業はロータリアンでなくてもできることであります。ロータリーの第一義はロータリアンの心の開発であり、それに基づく職業奉仕の実践によって自分の職業を安定させて、然る後に余裕があれば、慈善事業を実践してもよいと言うのであります。

要するに、井坂ガバナーの提唱は、職業奉仕を中心とするロータリー観の提唱であり、ロータリーの神通力は、実業の世界においてのみ発揮されるべきであると言い切っているのであります。これは、思想の系譜としては、ロータリーの哲学者アーサー・フレデリック・シェルドンの系譜に属するものであり、井坂ガバナーの提唱に深い感銘を受け、これに共鳴されたのが神戸ロータリークラブの直木太郎パストガバナーでありました。ここにシェルドンの思想の日本における系譜を見取ることができるのであります。この3ヶ条の中で、職業倫理との関係で特に重要なのは、第二の『ロータリアンたる者は賄賂を贈ることなかれ』であります。例えば、下請業者から挨拶代わりに菓子折を受け取って後で開けてみると、中に現金が入っていた場合に、これを会社の会計に入れて、自分は受け取っていないと言っても、受領の事実を否定することにはならないのであります。これを受け取ると何が失われるのか？受け取った人の良心が傷つくことになるのであります。パーシー・ホジソンの『奉仕こそわが努め』という本の中にいい言葉があります。

『泥棒は、人の物を取る。しかし、取られた人は決して何も取られてはいない。泥棒は自分の心を盗むのである。詐欺ペテン師は人を騙さない。自分の良心を騙すのである。この傷は、生涯癒えることはないであろう』と。これは、現象論ではなくて、本質論であります。したがって、菓子折は感謝の気持をもって受取ればよいのでありますが、金を受取ると、自分の信用が傷つくことになるのであります。信用というのは、何億円をもってしても購うことの出来ないほど尊いものであり、一旦失うと取返しのつかないものなのであります。

ところで、ここに賄賂というのは、法律上の概念ではありません。即ち、法律上、賄賂の授受によって収賄罪、贈賄罪が成立するためには、それを受け取る側が公務員でなければなりません。したがって、法律の世界では、私人間即ち、私事の間には賄賂罪は成立しないのであります。しかし、ロータリーは、法律の世界ではなく倫理の世界でありますから、倫

理運動の立場から、私人間の賄賂の授受をも禁止しているのです。単なるコンプライアンス即ち、法令遵守のレベルであれば、公務員に対して賄賂を贈らなければ犯罪にはならないのでありますから、私人間で賄賂を贈っても何ら問題にはならない筈であります。

ところが、ロータリーは、高潔な職業倫理を提唱する立場から私人間の賄賂の授受も禁止しているのです。しかもロータリーは、倫理運動の立場から賄賂の概念を広くとらえているのであります。即ち、ロータリーは、労働の対価として受取る正当な報酬、または取引の対価として受取る正当な所得以外の一切の金品の授受は、これを悉く賄賂と見做すのであります。したがって、これは法律概念ではなく、倫理概念であります。これが基本原則であります。この立場から見ると、盆暮の中元・歳暮も賄賂になります。すると、その品物の受領を拒むことが、相手の善意を踏みにじることになるなど、この原則だけでは処理し切れない様々な事態が発生します。そこで、ロータリーは、このような状況を踏まえて、第二の原則を立てます。それは、『公開の原則』(Publicity) であります。即ち、特定の物品または金銭の授受が、賄賂になるかどうか疑わしい場合には、それを公開すべし、というのであります。ロータリアンは、例会において、それが賄賂になるか否かを公表して、他のロータリアン意見を聞けばよいのであります。『歳暮として羊羹を貰ったがこれは賄賂か』と聞いてみて、皆が『それは社交儀礼のものだから賄賂にはならない』と言えば、それで賄賂性は消えるのであります。これに反して、例えばロッキード事件のピーナツ一つ5億円、これは誰に聞いても『それは賄賂だ』と言うでしょう。これはロータリーの倫理運動の立場から見て完全に賄賂であります。したがって、心に疚しいことなければ堂々と公開できる筈であります。ロータリーはそのところを見ているのであります。

第一に、ロータリアン自身が、その金品を受け取ることによって、職業関係の公正さを害しないか否か、心に疚しいことがないか否か、を自ら主観的に判断し、第二に、クラブ例会において、皆の意見を聞いて、客観的な社会倫理によって篩にかけるのであります。このようにして、ロータリーは、20世紀初頭以来、誠に高潔な職業倫理を維持してきたのであります。御静聴有り難うございました。



例会模様



例会模様

◆謝辞 南RC 長倉会長



本日は私どもの合同例会に貴重なご講演をいただき誠にありがとうございました。4クラブを代表しまして深く御礼申し上げます。職業奉仕はロータリーの根元と位置づけられていますが、本日伺った理念を心に刻み、倫理に基づいた行動をしたいと思っております。先生におかれまして今後も全国を飛び回りご多忙な日々をお過ごしになるかと推察申し上げますが、どうぞお体には充分留意されご健康である

事をご祈念申し上げます。本日は誠にありがとうございました。
ございました。



懇親会 釧路ベイRC植原元晴会長挨拶



懇親会模様



懇親会模様



懇親会模様



懇親会模様



こころの中を見つめよう 博愛を広げるために



◆ ◆ ◆ ◆ ◆
・次回のプログラム

10月15日(土)

「家族同伴ボーリング例会」

会場 パレスボウル

担当：親睦活動委員会

・点 鐘

長倉会長

今週の会報担当：長井一広会員

